

## まずは自分の社会性を問う

征矢英昭

体育科学系助教授

前号のタイトルは「教育の社会対応」。基礎や理念の教育を中心としたこれまでの大学教育だけでは立ちゆかなくなり、どうすれば社会のニーズに応えられるかが迫られている我々の課題の一つでもある。読んでみると、意外に個性的で多様な内容に戸惑いながらも、かえって楽しく読めた。大学における教育とは何か。社会対応の社会とは何を指すか。その解釈には個人差があるから当然であり、実はその対応も本質的に難しいのかもしれない。

それでも佐藤氏が紹介した国際総合学類におけるグローバル化への対応は、大学における教育の社会対応の一つの標準を示したものとして参考になる。国際社会に発信できる人材の育成を掲げ、知識・技術の取得、コミュニケーション能力、多様な価値観などを享受できる態度・行動を涵養するカリキュラムや人的環境づくりの重要性が指摘され、さらに同学類に所属する学生の高い留学実績などが紹介されている。また、現時点での矛盾や

問題を解決すべき新しい概念や取り組みの大学発信も重要と説く。

しかし、村尾氏が述べたように、どんな教育にも限界がある。カリキュラムが完璧でも学生の意欲が高まらねば学生は変わらない。学生が大学生活のいつ、どんな場面で、どう感じ学ぶのか、そして、どう行動が変容するかを考えそれに対処すべきだ。授業以外の場は意外に重要だ。クラブ活動や研究の場における教官と学生との間。フレッシュマンセミナーやコンパの席で両者の関係など。そこには教官と学生との枠を越えたマンツーマンの対話がある。そこで我々が学生に、大学と社会の関係を、さらに自分の夢や目標をどう語るか。それは学生の意識改革に少なからず影響を与える。

故林竹二氏の「教えることは学ぶこと」を借りれば、教育の社会対応とはさしずめ教官個人の問題となる。我々が社会にどう貢献できるかを考え、具体的な目標と行動を定めない限り良いカリキュラムも絵に描いた餅だ。スポーツも研究も、毎日の地味な取り組みのもつ意味や夢について我々が示せない限り学生はほとんど頑張らない、成長しない。土屋氏のいうように教官自身の意識改革が必要かもしれない。まずは足下から自分の社会性を見直すことだろうか。

(そやひであき 運動生化学)